

高木きよ子 「貴重な体験」

私にとって、センターは大きな意味をもっている。センターでの経験は、実にはかりしれないほど多くのことを私に与えてくれた。日本研究を志すアメリカ人（その他の国も含めて）との交流は、私のものの考え方や生きていく態度に大きな影響を与え、外国人に対する日本語教育の重要性を意識する上で、センターはかけがえのない場であった。センターで仕事をした二十年、その後も引き続きほとんど絶えることなく、教える機会に恵まれてきたことは、センターとのきずなの深さを思わずにはいられない。しかもこのセンターに、私は開所当初から身をおいた一人なのである。

センターの基礎づくりは1961年に開設されたスタンフォード大学日本研究センターに始まる。朝鮮戦争後、急速に高まってきた日本研究の魁の形でスタンフォード大学が東京に創設した日本語の研修所は、東大、慶大、早大そして日本女子大の協力により、当時の文京区高田老松町の和敬塾に置かれたが、ここは、日本人の男子大学生のための寮で、鉄筋コンクリートの三階建てで教室も備わっていた。事務所に使用したのは、旧細川邸の和洋折衷の邸宅で、床の間つきの和室にスリッパ履きという形であった。これは、日本文化に関心をもつアメリカ側には大いに歓迎されたが、西洋的な合理的生活を望む日本側には何とも不便極まる日常であった。教育の上でも、日本で、日本語だけで習うということに学生はなじみず、いろいろな問題がおこった。たしかに、教え方もまだ確立しておらず、手探りの状態であった。いわゆる日本語教育の草創期だったのである。教育の上だけでなく、学生の日常生活にも困難はつきまとい続けた。その頃の日本は、まだ戦後の貧困から脱して居らず、和敬塾（男子）・日本女子大の寮（女子）での生活を余儀なくされた学部学生は、食事をはじめとして生活全般にわたって、母国とは似ても似つかぬ不便さを味わわねばならず大変だったと思う。このようなさまざまな現実から学生側も日本人の方も貴重な体験をしたのである。

しかし、この混沌とした時代があり、それを乗り越えていったからこそセンターのその後のあの華々しい展開があったのだと思う。

1963年、センターは和敬塾から国際基督教大学へ移転し、やがてアメリカ・カナダの大学連合（当初は8大学）として発足した。それだけアメリカ側の日本語教育の必要性が増大したのである。学生の数も増え、日本語への熱意も向上した。教える側も教育方法に新しい道を探り、手づくりの教材も次々につくられていった。そして、1967年、バトラー所長の着任、紀尾井町への移転を機にセンターの新時代が始まった。この年、私は一年間コロンビア大学に招かれて日本語教育に携わったが、センターでの方法を活かしたやり方は、あちらでは初めてであり、大いに関心を持ったようである。

一年留守にして帰って見ると、センターはすっかり様変わりして活気に溢れていた。次々に新しい教材が開発され、教育方法が編み出されていった。日本語教育機関も各大学の講座も含めて次第に数を増していった。それらの中でセンターは、特に優れた機関としての評価を受けるようになったのは、嬉しいことであった。日本一、すなわち世界一という場で仕事ができる幸せをつくづく感じたものである。何ととっても優れた学生に恵まれていたこと。それがいい意味でも悪い意味でも大きな刺激になった。多くのことを私はセンターの学生から学んだ。その背後には、学生たちを育んだ各大学の日本研究の先達があり土

壤があった。センターから受けたのは、日本語教育の重要さだけではない。私自身の専門分野にも大きな影響をあたえた。センターを辞めて、日本語教育から身をひいてからも、センターは私の中でかなり大きな位置を占めている。かつて学生だった方々も、その多くが、今やアメリカの、世界の日本研究、あるいは日本関係の仕事の先頭にたっている。共に仕事をした歴代の所長・先生方・職員の方々、すべて心のアルバムに焼きついている。センターは、私の大きな財産なのである。

(元センター副所長、元お茶の水女子大学・東洋大学教授、文学博士、宗教学)